

平成 26 年度 海外臨床薬学研修報告書
「海外研修を通じて ー日本とアメリカの違いー」

研修期間：平成 26 年 7 月 9 日～7 月 21 日

研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

090973453

林 紗有

私は海外滞在経験があり、以前からアメリカの薬学教育・薬剤師に興味がありました。病院・薬局の実務実習を終えて日本の制度を理解し終えた今、アメリカの教育・薬剤師制度を見ることで、自身の成長に繋がるのではないかと考え、2014年7月9日から21日までアラバマ州にあるサンフォード大学での海外研修に参加しました。

今回の海外研修では私たちが主体となる授業（講義・話し合い等）を15回受けました。病態について、症例検討、実習でみている患者の症例報告など様々な形態の授業を受けました。また病院見学は2か所選んで訪れました。私が見学を訪れた病院は、**Christ Health Center** と **Children's Hospital of Alabama** です。

まず授業について報告します。日本の教育との大きな違いは、学生が主体となるように授業を進めていくことです。先生が話し続けるのではなく、学生に“考えさせる”ことを大切にし、いつでも質問ができるような環境をつくっています。先生が授業する際には必ず「質問はないか」と聞いてくれます。また質問を行った際には「よい質問ですね」などコメントを付けてくれるので、次回も質問しやすい授業体制になっています。また今回は体験できませんでしたが、サンフォード大学では他学年と一緒に学ぶ授業も組み込まれています。症例を与えられ、まず低学年が考えを述べ、高学年が実習で得られた知識を活かし、アドバイスをしたり、誤った方向に話し合いが進まないように軌道修正を行います。答えが正しいか正しくないかではなく、“考える”ことに重点を置いているため、出てきた意見を否定するのではなく、褒め合うことも大切にしています。知識がない低学年にも考えさせる時間を設けて、“分かる”喜びを授業を通じて教える教育体制を見て、日本でも実践できたらおもしろいのではないかと感じました。

次に病院見学について報告します。**Christ Health Center** では、基本的な調剤を実際に体験しました。アメリカでの薬はボトルでのお渡しであるため、日本で軟膏をつくる時に使用するヘラと板を使用して錠剤を数えますが、処方ごとに器具を清潔にしたり、ゴミが入らないような場所での調剤を行っていなかったため、日本の清潔面の管理はアメリカでは見られない、良いところだと感じました。また日本と同様、パソコンでの調剤管理を行っているため処方ミスは削減できますが、薬のダブルチェックは行われておらず、安全性が欠けているのではないかと感じました。しかし服薬指導に関しては個室で1時間かけて面談を行う患者さんもいると聞きました。吸入薬や自己注射に関しては出来るまで徹底して教えたり、コンプライアンスの悪い患者さんに対しては薬の管理方法を一緒に考えたり、工夫を提案したりするなど、日本より患者さんと向き合える時間が長いと感じました。日本の薬局でも患者に寄り添った医療を提供できる場所を設けることが出来たら、薬薬連携もさらに深まるのではないかと考えています。

Children's Hospital of Alabama は、アメリカで3番目に大きい病院で、セキュリティが厳しく、全ての扉にロックがかかっていました。病棟を見ると、廊下には全患者の血圧や心拍数などが表示されているモニターがあり、全医療者が患者情報を一目で共有できるようになっています。病室もガラス張りです。外から患者の状態を常にチェックすることも可能

となっています。常に患者を意識した医療体制である反面、患者のプライバシーに関しては日本のほうが徹底されていると感じました。しかし、これは文化の違いが大きくかわっており、プライバシーに関するクレームはアメリカでは一度もないそうです。アメリカだからこそ出来る医療体制なのかもしれないと感じました。パソコンを通じたカルテを見た話し合いではなく、1つのモニターを見て様々な職種と意見交換をすることで、チーム医療がよりよいものになるのではないかと考えたため、日本ではプライバシーに配慮し、ナースステーションに設置してはどうかと考えました。

最後に一番衝撃を受けた、学生の学びの姿勢について報告します。少なくとも私は、病院・薬局実習において自分の意見を自信を持って、働いている先生方に向かって言えることは出来ませんでした。他職種が大勢いる中、大きな声で「私はこう思います！」と発言する自信がなく、意見があるときは近くにいる指導薬剤師に述べていました。しかし、アメリカの学生は自分の気持ちを大事にし、学生の立場であっても目上の医療者に対して堂々と意見を述べていました。また例えそれが間違っていたとしても、恥じることなく次に進んでいく気持ちを持っていました。このような学びの姿勢は見習わなくてはならないと感じました。失敗を恐れては前へ進めないという気持ちを持つことは、今後働く上で大切にしていきたいと考えています。

研修に行く前は医療の進んでいるアメリカを見て圧倒するのではないかと感じていましたが、日本にも清潔面・安全面・病院と薬局の連携など良い部分があると改めて日本の医療を見つめ直すことが出来ました。文化の違いを認識したうえで、両国の良いところを取り入れることが出来ればと思いました。まずは学ぶ側の姿勢を積極的に、モチベーションを高めていく必要があると思っています。この研修で受けた刺激は、残りの学生生活だけでなく、就職してからもつなげていきたいと考えています。

今回の研修を通じて“人とのつながり”の大切さを最大限に得ることが出来ました。研修生10人のために授業をしてくださったサンフォードの先生方、病院見学をしてくださった先生方、また国際交流をするためにサンフォード大学の学生は夏休みにも関わらず私たちを温かく迎え入れてくれました。10日間をともに過ごし、より有意義な時間にしてくれた方々に感謝の言葉を述べたいです。またこのような機会を与えてくださった本校の先生方、一緒に研修に参加した9人の仲間に深く感謝いたします。ありがとうございました。